

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・5年

氏名: Barbara Ramos

授業科目名	国際獣医学インターンシップC
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>昔は「ヨーロッパの馬が大人しい」と聞いたことがありましたが、ヨーロッパでは保定器具の使用に加えて処置の前に鎮静薬を投与することが一般的ということが留学した後分かりました。治療しているときに極端に嫌がる馬や蹴ろうとする馬に我慢してもらわずに、フランス人が出来るだけ馬の痛みを軽減する方法を用いたり作業を中止したりしていました。また、大動物の扱い、保定方法、注射の仕方や包帯の巻き方の他、機会の少ない馬の歯科処置を観察して診察の流れ、道具の使い方について大まかに習いました。診察内容としては、X線撮影検査、眼科検査、超音波検査、歩様検査などにも携わることができました。</p>	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>多くの学生が毎日犬をキャンパスへ連れていき、大学のペットホテルに預ける習慣を身につけていました。また、教室、レストランや店の中に犬を連れてくるフランス人も多数いました。それらのことから、動物に対しては「ペット」という単語よりも人と共に生活をする「コンパニオンアニマル」(伴侶動物)としての意識が強いことに気づきました。フランス人の中ではワークライフバランスが貴重とされており、忙しい日々でも授業や診察の合間にコーヒーを飲んだり犬を散歩させたりする学生や先生を見かけました。同じく、日曜日は多くのレストランや売店などが閉店し業務時間外に会社からビジネスメールが送信されないように規制もあるそうです。</p>	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>ヨーロッパで獣医師は女性の方が多い職務となります。手術前に女性3人で馬を倒す作業をみた後、力作業が男性に限るものではないことに気づきました。小柄な女性でも重い馬用の飼料パック、干し草を運んだり、ロバを引っ張ったり、子牛を保定したりしていました。そのため「男性がやるので女性は離れてください」というような発言はなく、私もためらわずに子牛の運搬などに協力できました。また、メキシコ人、コロンビア人、スペイン人といった、私と似たようなバックグラウンドを持つ獣医学生に出会うことによって獣医学の中でのキャリア形成の多様性に目覚めて安心できました。</p>	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>鹿児島大学で自分の得た知識を活用して新しい視点から獣医学部の実習に参加していきたいと思えます。また、日本とヨーロッパの治療や処置の違いについて馬専門家や牛専門家の先生と情報を共有してディスカッションしてみたいと思えます。今後の鹿児島大学とのVetagro Supの交換留学プログラムの継続を支えるため、機会があれば興味のある後輩に自分の経験について語り、フランスへの留学がより身になるようにアドバイスをしてみたいと思えます。この経験が自分の卒業論文の参考になるだろうと思えますが、それを通して日本の獣医関係者にも参考になるようにしていきたいと思えます。</p>	

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所 属(学部(研究科)・学年)： 共同獣医学部・6年

氏 名： 下山 翔平

授業科目名	獣医学特別研修
<p>1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>私はVetAgro Supでの臨床実習を通して、馬の様々な症例をみることができ、日本の診療との違いを多く見出すことができた。最も異なると感じたのは、1頭に対する問診や検査時間、手術時間の長さであり、緊急オペ対象となる疝痛の馬にも2時間以上の検査や4時間程の麻酔時間で手術を行っていた。これらの検査方法や術式についても日本との違いを学ぶことができた。他にもX線検査、超音波検査、跛行診断、内視鏡検査、ICUや入院馬の治療にかけける時間も長く丁寧であり、多くの検査で鎮静薬を用いていた。これらの違いは、乗馬が多いため、馬の性格がおとなしいこと、また獣医師の数が日本と比べ多いため可能であると感じた。</p>	
<p>2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>フランスで実際に生活するには英語だけでは厳しいということ、フランスでの人と動物の関係性は日本と異なることの2つが強く印象に残っている。先生や学生の多くは英語を話すことができ、実習中も英語でコミュニケーションを取ることができるが、ホテルや駅などの公共施設以外だと英語が通じないことが多いため、簡単な買い物はできるが、数ヶ月単位の生活をするためにはフランス語が必須であると感じた。動物との関係性に関しては、日本と異なり、ただ可愛がるだけのペットではない。馬も犬もしつけが成されており、犬に関してはリードがなくても飼い主の隣を歩くなど、まさに人の家族の一員であると感じた。</p>	
<p>3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>私は、フランス語に関して挨拶程度しかわからない状態で実習に挑んだ。日々のミーティングや診療はフランス語で行われるため、言葉を聞いていても何もわからない。日本では、ただ先生が言う通りに受身で実習をしていても学ぶことはできるが、フランスでは自分から英語で尋ねて教えてもらい、今何をしているのか、次何をするのかを考えながら診療に挑まなくてはいけない。注射や保定などは何度かしたが、英語でコミュニケーションをとりながら行うため、自分から進んで尋ねる必要がある。この経験から、言語が通じる日本で、これから学ぶ機会や逆に獣医師として教える立場になった際に積極的に動く姿勢が身についたと思う。</p>	
<p>4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)</p> <p>今回の実習で学んだ獣医学的な技術や、精神面での成長は、今後獣医師として働く上で大きな糧となった。私は産業動物獣医師として獣医師の第一歩を踏み出すため、動物の診療業務だけでなく、防疫や食の安全にも関わるため地域社会への繋がりは大きいと思う。今後の目標として、まずは1人の獣医師として診療業務をこなせるようになること、そして今回の実習で得た知識や技術、飼養管理の面でも良い部分は取り入れ、できるだけ多くの獣医師や農家の方、獣医学生に伝えたい。今回の実習の成果を自分だけに留まらず、より多くの人と共有することで地域社会への貢献に繋がっていきと考えている。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・6年

氏名: 田原 和貴

授業科目名	獣医学特別研修
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>主に馬の外科学を見学した。競走馬が主な診療対象である日本とは異なり、乗用馬が多く診療対象となるフランスでは、診療頭数も多く、様々な疾患の手術を見学することができた。鹿児島大学での外科的な診療は手根関節の関節鏡手術や、疝痛の開腹手術が主であるが、VetAgro Supでは卵巣腫瘍の腹腔鏡手術を見学することができた。</p> <p>また、馬の獣医師は専門分野に分かれており、それぞれの専門家が協力しながら診療を行っていることを知った。日本では施設の関係上、外科は特定の専門的な獣医師が存在するが、それ以外は基本的にすべての分野を1人の獣医師が行っている。私は日本で働く予定であるが、将来的には1つの専門分野に長けた獣医師として活動したい。</p>	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>VetAgro Supではレジデントやインターンの獣医師の先生が多く、診療への参加は主に彼らが実施しており、馬の外科実習に関しては学生は概ね見学している様子だった。ICUの治療行為は学生とレジデントの先生が行っており、設置された留置針からの静脈内投与や経口投与は学生が行い、筋肉内注射はレジデントの先生が行っていた。採血はレジデントの先生が見ている状況で学生がトライし、上手く採血できない場合には先生が採血していた。</p> <p>また、フランス人は目が合った際やあいさつ、会話をしている際には笑顔で対応してくれることを知った。人と目を合わせることをしない日本人との大きな違いだと感じた。</p>	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>馬の跛行診断の際に日本では蹄が原因の跛行だと診断を付ける状況でもフランスでは診断麻酔を行い、しっかりとした確定診断を行っていた。この診療を見学したことで、フランスでの診断に対する考え方が日本人のものとは異なることがわかった。日本では馬は産業動物としての色が強いが、フランスでは愛玩動物としての色が強い。この経験を経て、今後馬の獣医師として日本で働くうえで、診断を行う際にある程度のルーティンは設計するが、それにこだわるのではなく、オーナー1人1人に合わせて検査の追加や省略を臨機応変に実施できるようになりたいと強く感じた。</p>	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>今回の実習で獣医療の先進国であるフランスの獣医療を実際に目で見て体験することができたので、日本の獣医療に携わり、比較することで日本の獣医療の長所・短所を見極め、より良い日本の馬の獣医療を提供し、周囲の獣医師に伝えることで地域の獣医療の向上に貢献したい。また、フランスだけではなく、アメリカやドイツ等の獣医療先進国にも足を運び、日本を含めた獣医療先進国の獣医療や考え方の違いを学ぶことで様々な角度で物事を考え、患畜・オーナーに最適な診療を実施できる獣医師になり、それを周囲の獣医師や後世に伝えることで地域の獣医療の発展・維持に貢献したい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【研修参加者】

所属(学部(研究科)・学年): 共同獣医学部・6年

氏名: 樋ノ口 峰大

授業科目名	獣医学特別研修
1. 研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>牛だけでなく、羊や山羊、ラマの診療を見ることができました。日本と異なり、治療可能ならば治療する文化が強いことがとても印象的でした。実習参加前に往診があると聞いていましたが往診を見ることはできませんでした。往診を見ることができなかったのは残念ですが、先生の指導のもと、学生主体で治療を行なっていることに驚きました。朝のカンファレンスが重要視されていて、毎日入院中の動物の状態について学生全員が参加して議論を行っていました。今回、牛の頭部腫瘍のCT検査、剖検、骨折整復後の入院管理、羊の妊娠検査(エコー、血液検査)、腐蹄病の治療、山羊の乳房切除後の感染症治療、ラマの骨折整復後の入院管理を行いました。</p>	
2. 現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>犬の躰が徹底されていると感じました。リードをしていない犬が多く見られましたが、飼い主の向かう方向についていく姿をどの犬でも見かけました。また、物乞いする人やスリなどが多く見られ、改めて日本の治安の良さを再認識しました。お店に入るときお互いに挨拶する、買い物終わりにお互いにお礼を言う文化があり、不慣れな言語にも対応してくれてフランスの温かさを感じました。実習前に微々たるものながら、フランス語での挨拶や会話で必要なフレーズを覚えていきましたが、やはり発音がかなり難しく伝わらないことが多々ありました。日本のように、24時間営業するようなお店がほとんどなく、休日は自分や家族と過ごす時間を大切にしていることが伺えました。</p>	
3. 研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>実習前は会話がフランス語であったり、初めての海外研修で緊張もしていた部分もあったせいで、受け身がちになり、ただ見学していただけでしたが、学生主体で入院管理から治療に動くことに影響されて能動的に動くことが大切だとわかり、英語で質問すると、受け答えしてもらったことから、後半では積極的に入院管理や治療の補助につくことができました。特に、成牛での骨折整復後の包帯の巻き直しは経験したことがなく、やり方を教わりながら巻き直した時は達成感がありました。また、英語での会話も実習前はある単語について言い換える力がなかったものの、それだけでは上手く伝わらないことが多かったため、上手く伝えられるように調べて、さまざまな言い換えの表現ができるようになりました。</p>	
4. 地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。(250～300字程度)	
<p>今回の実習を通じて、Vet Agro Supの獣医学教育の高さを実感したとともに、このような機会を与えてくださる国際水準での獣医学教育を行う鹿児島大学の教育水準の高さを改めて感じました。私は4月から獣医師として社会に出ますが、鹿児島大学で高度な教育を受けさせていただいたことを誇りに持って、獣医師として社会に貢献できる人材になろうと思います。また、私の就職先でも、海外研修プログラムがあります。地域との国際協力を深めるために、今回の貴重な経験を活かして、このようなプログラムに積極的に参加し、グローバル的な視点をより身につけて、地域貢献できるよう努めます。</p>	